

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2011～2014

課題番号：23242052

研究課題名(和文) 日本社会の多民族化に向けたエスニック・コンフリクトに関する応用地理学的研究

研究課題名(英文) Applied geographic study on the ethnic conflict in Japan as a multiethnic nation

## 研究代表者

山下 清海 (YAMASHITA, Kiyomi)

筑波大学・生命環境系・教授

研究者番号：00166662

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 22,900,000円

研究成果の概要(和文)：今後、在留外国人が増加して日本社会の多民族化が進行し、外国人の集住地域が形成されていくなかで、日本においても、海外で見られるようなエスニック・コンフリクトが高まることが懸念される。そこで、本研究では、海外において、フィールドワークに基づき、エスニック・コンフリクトの事例を考察し、それらの経験をもとに、国内の外国人集住地域において生起するエスニック・コンフリクトに対していかに対応すべきかの方策を探ることを目的とした。

研究成果の概要(英文)：Foreign residents have increased in Japan and the areas with concentrated population of non-Japanese residents have been formed. Observing the ethnic conflict in multiethnic nations, Japanese society may also face aggravated ethnic conflict in the near future. The purpose of this study is to examine the cases of ethnic conflict in foreign countries on the basis of fieldworks and to search for appropriate means to alleviate the ethnic conflict that might occur in Japan.

研究分野：人文地理学

キーワード：エスニック地理学 エスニック・コンフリクト 移民 在日外国人 エスニシティ チャイナタウン  
華僑華人 エスニック集団

### 1. 研究開始当初の背景

海外の特定の国・地域・都市におけるエスニック社会に関する事例研究は少なくないが、エスニック集団と居住地域のホスト社会との相互関係に重点を置いた地理学的研究は乏しい。そこで本研究では、エスニック集団と居住地域のホスト社会の間でどのようなエスニック・コンフリクトが発生するのかわかるという点を重視し、フィールドワークに基づく実証的研究を目指した。日本においても、外国人集住地域において住民が外国人嫌悪を公に表す現象はすでに起きており、今後外国人人口がさらに増加していくなかで、海外で生起しているような、より深刻な形でのエスニック・コンフリクトが具現化してくると予想される。そこで、本研究では、海外のエスニック・コンフリクトの事例を調査し、海外の経験を応用して、今後、日本がエスニック・コンフリクトにいかに対応するべきかの方策を探り、社会的な貢献を目指したいと考えるに至った。

### 2. 研究の目的

法務省の在留外国人統計によれば、1988年に94万人であった在日外国人は、2014年末には212万人となり、総人口の1.7%を占めるまでに増加した。外国人の増加は、地域によっては居住地域の住民と軋轢を生じさせている。今後、日本社会の多民族化が進行し、外国人の集住地域が形成されていくなかで、日本においても、海外で見られるようなエスニック・コンフリクトが高まる懸念される。海外では、エスニック・コンフリクトがみられる一方で、多民族性を利用した観光開発や、多民族コミュニティの再生による都市再開発が効果を収めている地域もある。そこで、本研究では、海外のエスニック・コンフリクトの事例をフィールドワークに基づいて考察し、それらの経験をもとに、国内の外国人集住地域において生起するエスニック・コンフリクトに対していかに対応するべきかの方策を探ることを目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究では、以下の3段階に沿って順次研究を進めていった。

#### (1) 問題意識の共有

研究分担者間で問題意識を共有し、意見・情報交換を密にする体制を組むため、研究会を開催した。

#### (2) 事例地域におけるインテンシブなフィールドワーク

海外ではイギリス・フランス・イタリア・オーストリア・アメリカ合衆国・カナダ・オーストラリア・モーリシャスなどにおける事例地域で、また国内では華人・コリアン・ブラジル人などの集住地域でフィールドワークを実施した。

#### (3) 研究成果の公開

2014年9月、富山大学五福キャンパスにお

いて開催された日本地理学会大会において、「エスニック集団とホスト社会～日本社会の多国籍化に向けて～」と題するシンポジウムを開催し、本研究で得られた研究成果について報告し討議を行った。

### 4. 研究成果

本研究の主要な成果について、地域に分けてまとめて報告する。

#### (1) ヨーロッパ

イギリスに関して、根田克彦は、エスニック・コンフリクトの実態について、フィールドワークに基づいて都市レベルで究明するとともに、その背景・要因、および行政サイドの対応について明らかにすることを目的とした。調査は次の手順で行った。2011年にイギリスのエスニック集団の中でも特にイスラム教徒に着目して、ノッティンガム市のインナーシティにおけるイスラム教徒が集中する地区における周辺商店街の土地利用調査を行い、エスニック・ビジネスの実態を明らかにした。しかし、同年8月にイングランド暴動が発生した。そこで、翌年から2011年暴動の調査を主として行うこととした。そのため、2012～2014年度にはロンドンにおいて、2011年イングランド暴動の発端となったトッテナム現場の土地利用を調査し、ロンドン郊外で大規模な暴動が発生したクロイドン中心市街地の土地利用調査と市役所の職員に対するインタビューを行った。さらに、イングランド暴動に関する論文、政府が発行した暴動に関する統計、民間新聞社が作成した暴徒に関するインタビューを収集した。イングランド暴動に関する従来の日本の研究では、2011年の暴動が、従来の民族差別や階級社会の差別とは異なり、1980年代以降における福祉切り捨て政策により生じた貧困層による新たな格差社会の問題を背景としていることが指摘された。これらの指摘は、イギリスにおける2011年暴動に関する記述と一致する。しかし、本調査による統計分析により、ロンドン郊外でも黒人人口が多い、もしくは急増しているエリアが大規模暴動の発生地であることがわかり、2011年の暴動における黒人差別の問題を軽視するべきではないことを指摘できた。

フランスについては、荒又美陽が、パリにおける移民地区グットドールを対象に都市計画事業と地区の変容に関する調査を行った。グットドール地区では、1980年代から現在まで都市計画事業が絶えず計画され、実行されてきた。そこでは、地区が不衛生（insalubre）だとされている。それは19世紀以来の衛生主義的な都市計画が、常に都市の新しい居住者（19世紀には農村から移住した労働者、20世紀前半には東方ユダヤ移民など）を監視し、時には排除しようとしてきた流れの中に、グットドールの状況が位置づけられることを意味する。第二次大戦後、ここにはアルジェリア、そしてサハラ以南のアフ

リカからの移民が数多く住むようになり、「受け入れの地 lieu d'accueil」「移民の地区 quartier de l'immigration」と呼ばれている。本研究の中では、地区でのインタビュー調査とともに文献、行政資料による調査を行った。まずはグットドール地区の歴史と都市計画事業の経緯、また関連する先行研究の整理を行った。その成果は荒又美陽 2013「パリ移民地区の再開発と「社会的混合」グット・ドール地区の形成と変容」『恵泉女学園大学紀要』(第 25 号, 37-52)にまとめた。そこでは、19 世紀に鉄道に関連する労働者の居住地として発展したグットドールが、移民の地区として知られるようになって以降に都市計画事業が検討されるようになったこと、また 1980 年代と 2000 年代の事業の方向性はかなり異なっており、現在の事業の方が地区の性質をよりラディカルに変化させる可能性があることを指摘した。

その後、都市計画事業の中で建設されることとなったイスラム文化協会へのインタビュー調査を中心として、グットドール地区のムスリムに関する論文を執筆した。ここでは、礼拝の場を都市計画事業で失ったムスリムが、金曜日に路上で集合的礼拝を行うようになり、極右団体などによる批判が高まったこと、そのために市が代替の場を提供することになったという経緯を追っている。

加賀美雅弘は、ヨーロッパの先住集団および外国人・移民集団を対象に検討を行った。具体的には、先住集団の事例としてイタリア・南チロル地方のドイツ系集団を対象にしたエスニック文化の観光資源化に関する分析を行った。また、外国人・移民集団の事例として、オーストリア・ウィーンにおけるエスニック市場に関して考察した。

南チロル地方では、第一次世界大戦後にこの地域がイタリア領になって以来、イタリア国内におけるドイツ系少数集団をめぐる激しいコンフリクトが展開されてきた。現在は自治区としてドイツ系集団の伝統文化を保護する政策が実施されており、地域の観光地化が進行する中で、地域の歴史や伝統文化を展示し、ドイツ系集団の個性を強調する博物館の設置が進められている。また市町村レベルでも、ワイン祭りなどのイベントにおいて、舞踊や演奏、伝統工芸品の展示・販売などエスニック文化を強調する企画が活発に行われている。観光地化が進む南チロル地方においてエスニック文化は明らかに観光資源化しつつあり、住民の所得水準の向上によってエスニック集団の共存の活路が見出されることが明らかになった。

ウィーンでは、外国人人口が急増する都市におけるエスニック集団とホスト集団との関係について、エスニック市場の景観に着目した考察を行った。まず外国人の生活必需品を販売するエスニック市場であるプルネン市場は、行政による整備が進められ、トルコ語などの言語やハラールミートなど独特の文

化を反映した景観がみられるが、一般市民にとっては関心が弱い市場である。一方、市内最大のエスニック市場であるナッシュマルクトは、外国人が経営する飲食店や食材店が集積し、一般市民や観光客でにぎわっている。ウィーンの歴史的景観を保ちながらエスニック景観を商品化した市場であり、ここから多文化共生の可能性に関する地域的文脈を明らかにした。

## (2) 北アメリカ

矢ヶ崎典隆は、多民族社会として知られるアメリカ合衆国を対象として、移民社会とホスト社会の関係とエスニック・コンフリクトに関して研究した。対象としたのは、1970 年代から多民族化が進行したロサンゼルス大都市圏である。ロサンゼルス都市圏の展開は、スペイン・メキシコ時代(1847 年まで)、アメリカ都市の萌芽(1848~1869 年)、保養都市の建設(1870~1899 年)、総合的工業都市の形成(1900~1939 年)、工業発展と郊外化(1940~1969 年)、産業構造の変化と都市の分断化(1970 年以降)に時期区分することができる。この間、移民とホスト社会との摩擦が繰り返された。最初の主要な事件は中国人虐殺事件(1871 年)であった。20 世紀に入ると日本人移民が増加したが、日米戦争が勃発すると、1942 年には日本人移民と日系人が強制収容された。さらに、1943 年ズートスーツ暴動事件では、メキシコ系住民に対する白人ホスト社会の不満がダウタウンで表出した。白人ホスト社会とアフリカ系住民は明瞭に住み分けていた。ロサンゼルス市中心部の南側には工業地区が形成され、それに近接して白人ブルーカラー労働者の住宅地が広がり、その西側にアフリカ系居住地区が存在した。ワッツ暴動事件(1965 年)ではアフリカ系住民による白人ホスト社会への不満が爆発した。さらに 1992 年には、サウスセントラル地区で暴動事件が発生した。増加しつつあった韓国系移民が経営する商店も被害にあった。

1970 年代からのアジアやラテンアメリカからの移民の流入に伴って、ロサンゼルス大都市圏にはエスニックモザイクが形成された。そこには、エスニックタウンが形成され、多様な景観と生活文化がみられる。ロサンゼルス大都市圏ではアジア化とラテンアメリカ化が進んでいる。小規模都市によって構成されるロサンゼルス大都市圏では、広域な都市政策が行われず、エスニックモザイクが固定化しており、エスニックボーダーは景観から観察することができる。多民族社会ロサンゼルスから将来のアメリカを考えることができる。

大石太郎は、カナダの事例を検討した。第一に、カナダの公用語マイノリティの事例としてマニトバ州ウィニペグのフランス系コミュニティであるサン・ボニファスをとりあげ、その実態をフィールドワークに基づいて観光や都市再生とのかかわりから検討した。

その結果は次のようにまとめられる。サン・ボニファスは、1818年にフランス系カトリックの宣教団により建設されて以来、早くからカナダ西部におけるフランス系コミュニティの中心として発展した。従来は宗教施設やフランス系カナダを代表する作家ガブリエル・ロワの生家などが重要な観光資源であったが、最近ではプロヴァンシェ大通り沿いにフランス語系ビジネスが集積し、散策を楽しめる魅力的な街づくりが進められていることを明らかにした。第二に、ケベック州のホスト社会としての側面に注目し、2013年秋に世論を二分した「ケベックの価値」憲章をめぐる論争とそこから浮き彫りになるホスト社会としてのケベック州の現状をフィールドワークに基づいて検討した。その結果は次のようにまとめられる。「ケベックの価値」憲章をめぐる論争において問題となったのは公務員等が宗教的シンボルを身につけることを禁止する規定の是非であり、ムスリム女性のスカーフやユダヤ教徒のキツパが主なターゲットであるとの批判があった。それにもかかわらず、「ケベックの価値」憲章がケベック州の多数を占めるフランス語話者に一定の支持を得ていたことを指摘し、その背景にケベック州のフランス語話者に残る少数派意識や、1960年代以降に急速に近代化したケベック州が実現してきた宗教的中立性や男女平等といった「ケベックの価値」が脅かされているという危機感があることを明らかにした。

### (3) オーストラリア

吉田道代は、ボートで到着する庇護申請者への対応について、規制強化か緩和かという国民的な議論がかわされてきたオーストラリアを対象に研究を進めた。このような議論では、表向きは人種や民族について直接言及されることはない。しかし、ボートで到着する庇護申請者は主に南アジアや中東地域の出身で、アングロ＝ケルト系オーストラリア人を主流とするオーストラリア社会において、異なる民族的背景を持つ移住希望者をどこまで受け入れるかは、隠れた争点となっている。そこで、本研究では、この争点に深く関わる庇護申請者向け滞在施設に焦点を当て、庇護申請者をめぐる排除と包摂の問題を論じることとした。主な調査対象は、規制緩和の時期に当たる2010年に南オーストラリア州アデレード郊外のインパーブラッキーに設置された収容代替施設（APOD：Alternative Place of Detention）とし、庇護申請者や難民を支援する非政府組織の職員に聞き取り調査を行った。

APODは、代替（alternative）という言葉に表されるように、これまでの庇護申請者向け収容施設と異なり、地域の学校に通えるなど開放的であるという特徴を持つ。それゆえに、労働党政権が設置計画を発表した際、予定地の地元住民の多くは、この計画に反対した。しかし、この施設で地元住民が雇用され、

学校などを通じて収容施設の子供や親との交流も行われるようになると、地元住民の間で表立った反対意見は見られなくなった。収容施設におけるこうした包摂的な色彩は、2013年の自由党・国民党連合に政権が移ったことによって意図的に消されていった。包摂の象徴としてのAPODは地元の地域レベルでは受け入れられるようになったが、その態度は国民全体には広がらず、政府によって庇護申請者の犯罪者扱いが強化され、排除の性格が強く打ち出されるようになった。この施設は、2014年12月に最後の滞在者を移送し、現在は使用されていない。

### (4) 世界と日本の新華僑

山下清海は、世界および日本の多くの事例を検討しながら、新華僑とホスト社会の関係について考察を行った。世界各地でフィールドワークを行った結果、社会経済的地位が低い新華僑は、オールドチャイナタウンに流入する傾向があり、北米・西欧・オーストラリアなどのオールドチャイナタウンでは、観光地化がさらに進行する傾向が認められた。老華僑がオールドチャイナタウンを離れていくなかで、そのニッチに流入する新華僑によって、チャイナタウンの衰退は免れ、活性化されている。また、治安の悪化や、ホスト社会との交流が乏しい新華僑の内向的性格などに地元ホスト社会から批判が出ている。北米やオーストラリアなどでは裕福な新華僑は、オールドチャイナタウンを経ずに、直接、郊外にニューチャイナタウンを形成する。この場合、ホスト社会側からは新華僑の流入による地価の高騰、住宅景観の破壊などの問題が提起されている。

従来、老華僑が少なかった南欧や東欧への新華僑の流入が1990年代以降顕著になってきている。イタリアやスペインでは、不法入国、密輸、脱税、売春などの増加とともに、落書き、ゴミの路上投棄など、新華僑の日常マナーの悪さが、ホスト社会から批判を受け、新華僑に対する取り締まり強化の世論が高まっている。一方、ハンガリー・ルーマニア・ポーランドなど東ヨーロッパでは、中国製品を販売する大規模なコマーシャルセンター型チャイナタウンが形成されている。

次に、日本における新華僑とホスト社会の関係を検証した。オールドチャイナタウンへの新華僑の流入という現象は、横浜中華街でも顕著にみられた。新華僑自身による中国料理店の開業が増加し、不況のために廃業する老華僑の中国料理店を、新華僑が受け継ぐ例が増加している。新華僑が横浜中華街の衰退を防いでいる側面がある反面、客引き、押し売り、ゴミ出しなどのマナーの悪化や低価格の過当競争などの弊害が生じている。池袋北口周辺における新華僑経営の店舗の集積による「池袋チャイナタウン」の形成では、新華僑と地元商店会との交流は乏しい状況が継続している。

### (5) 日本

福本 拓は、日本を事例に、エスニック・コンフリクトについて、エスニック空間の形成過程との関連から分析することを試みた。研究課題の一つは、大阪市生野区の在日朝鮮人「オールドカマー」と韓国人「ニューカマー」を対象としたもので、特にマイクロスケールの土地・住宅取得の側面に着目した。その結果、オールドカマーについては、エスニック集団内の諸資源（民族金融機関を含む）が一定程度活用されているものの、日本の金融機関への依存度も高いことが明らかとなった。社会的差別のある中で、ホスト社会からの融資を得られていた点は、土地の持つ資産としての性質が関連していると考えられる。ニューカマーに関しては、今里新地の事例から、花街の衰退という文脈の下、日本人から在日朝鮮人への土地所有権移転が生じ、エスニックな景観が現出するとともに、既存住民との間で軋轢が生じていることが明らかとなった。この過程では、エスニックな不動産業者や金融機関の関与も推測された。

もう一つの研究課題として、三重県四日市市の日系ブラジル人集住地区を事例に、既存の日本人住民による受け入れ意識の分析も行い、地区内の住居種別（一戸建て、集合住宅）の差異によってその意識が異なることも実証的に示した。この事例では、特に一戸建て住民では、ブラジル人の存在が労働力再生産の有り様との関係から問題視されており、その背景には郊外空間における集会的消費の変質が深く関連していることを指摘した。

以上の成果は、コンフリクトをはじめとするエスニック集団とホスト社会の関係性を考える際に、地域的要因、特に景観や住民構成の長期的な変化を意識する必要性を示唆している。換言すれば、今後の研究において、個別具体的な地域・場所の特徴を十分に勘案することが不可欠だといえる。

次に、在日ブラジル人に関して、片岡博美は、おもに以下の3つのテーマで、調査・研究を進めた。まず、1番目のテーマは、『「コンタクト・ゾーン」としてのエスニック・ビジネスの展開』である。本研究では、1990年の入管法改正以降ブラジル人が増加した群馬県大泉町ならびに静岡県浜松市において展開しているブラジル系ビジネスの2000年以降の業種展開や立地展開、ホスト社会とのかかわりについてアンケート調査および聞き取り調査を行った。その結果、1995～2000年のブラジル系ビジネスが拡大展開した時期と比較し、立地展開（特に集積場所）が変化しており、また事業所はホスト社会との連携が深まっているものと、エスニック集団に閉じられているものと二分されることが明らかとなった。この変化は大泉町と浜松市との間で地域的な差異がみとめられる。続く2番目は、ホスト社会におけるブラジル人住民の生活活動についての調査である。ホスト社会におけるエスニック・コンフリクトは、エスニック集団成員とホスト社会住民との

接触のありように大きく左右されるため、従来「顔の见えない」存在と指摘されてきた国内の集住地域におけるブラジル人の日常生活が、特に消費活動・経済活動といった側面でもかなりホスト社会との同化が進んでいることが明らかとなった。最後の3番目のテーマは、ホスト社会におけるブラジル人の防災・災害への意識調査である。これは、以前（東日本大震災前）に行った同調査で得られたデータが、東日本大震災以降いかに変化したかを明らかにするものである。静岡県浜松市のブラジル人110人を対象に、アンケート調査を行い、現在結果を取りまとめ中である。

以上の研究担当者全員の成果については、2015年度内に学術書として刊行するよう準備を進めている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計12件)

福本 拓・藤本久司・江成 幸・長尾直洋 (2015): 集会的消費の変質に着目した外国人受け入れ意識の分析 三重県四日市市の日系ブラジル人集住地区を事例に 地理学評論, 88(4), (掲載決定) <査読有>

山下清海 (2015): モーリシャスにおける華人社会の変容とポートルイスのチャイナタウンの地域的特色 立命館国際研究, 27(4), 115-139. <査読無> [https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_uri&item\\_id=33726](https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=33726)

大石太郎 (2015): ホスト社会におけるケベックのディレンマ 「ケベックの価値」憲章をめぐる論争から 国際学研究, 4(1), 33-44. <査読無>

片岡博美 (2014): 外国人は顔の见えない存在なのか? 2000年以降における滞日ブラジル人の生活活動の分析から 地理学評論, 87(5), 367-385. <査読有>

ARAMATA Miyo (2014): The Muslim town in France: Difficulties and possibilities. Japanese Journal of Human Geography, 65(6), 85-94. <査読有>

YAMASHITA Kiyomi (2013): A comparative study of Chinatowns around the world: Focusing on the increase in new Chinese immigrants and formation of new Chinatowns. Japanese Journal of Human Geography, 65(6), 67-84. <査読有>

KATAOKA Hiromi (2013): "Concentrated ethnic towns" and "Dispersed/assimilated ethnic towns": Regional disparities in the formation and development of ethnic towns Case studies of Brazilian residents in Japan. Japanese Journal of Human Geography, 65(6), 34-47. <査読有>

FUKUMOTO Taku (2013): The persistence of

the residential concentration of Koreans in Osaka from 1950 to 1980: its relation to land transfers and home-work relationship. *Japanese Journal of Human Geography*, 65(6), 15-33. <査読有>

[学会発表](計15件)

山下清海: 新華僑の増加とホスト社会 世界と日本の新旧チャイナタウンの事例から .2014年日本地理学会秋季学術大会, 2014年9月21日, 富山大学五福キャンパス, 富山市

加賀美雅弘: EU都市におけるエスニック景観のコンフリクト 多文化共存の可能性に向けた検討 .2014年日本地理学会秋季学術大会, 2014年9月21日, 富山大学五福キャンパス, 富山市

根田克彦: 2011年イギリス暴動と暴徒特性 .2014年日本地理学会秋季学術大会, 2014年9月21日, 富山大学五福キャンパス, 富山市

片岡博美: エスニック集団とホスト社会との接点 ブラジル人住民が日本人住民と接する「とき」そして「ところ」 .2014年日本地理学会秋季学術大会, 2014年9月21日, 富山大学五福キャンパス, 富山市

吉田道代: オーストラリアにおける庇護申請者への対応 規制の強化と緩和のはざままで .2014年日本地理学会秋季学術大会, 2014年9月21日, 富山大学五福キャンパス, 富山市

大石太郎: ホスト社会におけるケベックのディレンマとエスニック・コミュニティ 「ケベックの価値」憲章をめぐる論争から .2014年日本地理学会秋季学術大会, 2014年9月21日, 富山大学五福キャンパス, 富山市

福本 拓: 「花街」からエスニック空間へ 大阪市生野区新今里におけるエスニック・コンフリクトの表出 .2014年日本地理学会秋季学術大会, 2014年9月21日, 富山大学五福キャンパス, 富山市

YOSHIDA Michiyo: "Don't expect an easy life awaiting you": Asylum seekers and welfare in Japan. The IGU 2014 Krakow Regional Conference 2014年8月20日, Jagiellonian University, Krakow, Poland

ARAMATA Miyo: "Social mix" and Muslim migrants: Inclusion and exclusion in the neighborhood of the Goutte d'Or of Paris. International Geographical Union 2013 Kyoto Regional Conference, 2013年8月6日, 京都国際会館, 京都市

FUKUMOTO Taku: The role of ethnic resources in regard to the high Korean population concentration in Osaka, Japan. International Geographical Union

2013 Kyoto Regional Conference, 2013年8月6日, 京都国際会館, 京都市

[図書](計3件)

山下清海編(2014): 『改革開放後の中国郷 - 在日老華僑・新華僑の出身地の変容 - 』明石書店, 278頁.

山本健児・平川一臣編(2014): 『中央・北ヨーロッパ(朝倉世界地理講座)』朝倉書店, 412-421所収, 加賀美雅弘: ウィーン観光客と外国人が織りなす都市.

Wong, Bernard P. and Tan Chee-Beng eds. (2013): "Chinatowns around the world: Gilded ghetto, ethnopoliis, and cultural diaspora" Brill, Leiden, The Netherlands, 247-262所収, YAMASHITA Kiyomi: Ikebukuro Chinatown in Tokyo: The first "new Chinatown" in Japan.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山下 清海 (YAMASHITA, KIYOMI)  
筑波大学・生命環境系・教授  
研究者番号: 0016662

(2) 研究分担者

矢ヶ崎 典隆 (YAGASAKI, NORITAKA)  
日本大学・文理学部・教授  
研究者番号: 30166475

加賀美 雅弘 (KAGAMI, MASAHIRO)  
東京学芸大学・教育学部・教授  
研究者番号: 60185709

根田 克彦 (NEDA, KATSUHIKO)  
奈良教育大学・教育学部・教授  
研究者番号: 50192258

吉田 道代 (YOSHIDA, MICHIOYO)  
和歌山大学・観光学部・教授  
研究者番号: 40368395

片岡 博美 (KATAOKA, HIROMI)  
近畿大学・経済学部・准教授  
研究者番号: 70432226

大石 太郎 (OISHI, TARO)  
関西学院大学・国際学部・准教授  
研究者番号: 70433092

福本 拓 (FUKUMOTO, TAKU)  
宮崎産業経営大学・法学部・准教授  
研究者番号: 50456810

荒又 美陽 (ARAMATA, MIYO)  
恵泉女学園大学・人間社会学部・准教授  
研究者番号: 60409810